

健康メモ

父性と母性

広島市医師会理事 二宮 基樹
広島市民病院外科主任部長

私は胃癌の外

科治療を専門にしているが、ある患者さんのご家族がぼそつと



漏らした一言には驚いた。「父は先生のことを父親のように思い、頼りにして慕っていますからね」。一〇歳も年上の彼が私のことを父親のように思うということは一体どういうことなのだろうと考え込んでしまった。手術前後の患者さんはこれまで経験したことのない不安と恐怖でいっぱいである。強いものに支えられた

い、守られたいという願望が主治医に「父親」のイメージを重ね合わせ期待もしているのだろう、との結論にやがて思い至った。

もちろん、手術に際しては本人の治ってやろうという意欲と行動がとても大切であり、外科医が手術という手段で手助けをしても最終的には患者本人の力により治っていくのである。しかし、技術がいい加減であったら無論のことであるが、父親として頼りがいかなかったら不安でしようにないであろうし、辛い入院生活になってしまいうであろう。

ところで、最近母性ということについて考えさせられることがあった。若い女性研修医のM医師の評判がすこぶる良いのである。退院した患者さんに外来でよく彼女の近況を尋ねられ、転動したという言葉に多くの患者さんは大きな失望を隠しもしない。よく聞いてみれば、外科医とし

てはまだ経験が浅くて未熟な彼女の人気の秘密は包み込むような優しさにあった。入院中に笑顔でやさしく対応する彼女に随分と癒され救われたというのである。そして、母親に對する甘えにも似た感情を抱いているのに気づき、これは母性を求めているのではないかと感じた。不安で弱い気持ちになっっている術前術後の状態にあつて、甘え癒される存在というのとはとても貴重なものであるが、われわれ男性医師には役割を代行できない部分がある。

女性医師が増え、地域偏在と並んで医師不足の元凶の一つと指摘されてもいる此頃であるが、女性医師は固有の価値を持って、役割を果たしており素直にそのことを評価したい。医療の世帯にも、やはり両性が必要なのである。